CD－ROMと図書館の未来

教育学部助教授
山下智恵子

図書館という語は，Library の明治中期の訳語であり，当初は，ズショと読んだということです。文字通り「図書・記録その他の資料を集め保管し，公衆に閲覧させる施設」であるわけです。

しかし，この図書館も，コンピュータが図書の管理や文献の検索に使われ始めたこの数年来，少しづつ姿を変え始めているように思われます。文献の検索は，端末からコンピュータのネットワークを経由してデータ・ベースを活用することで，蔵書として手元になくても，必要な文献を複写の形で手に入れることを可能にしています。

この数年の間に，私たちを取り巻くあらゆる情報を，電子信号に変えて，保存し，取り出し，加工し，送る技術が，驚くほどの速さで進みました。音，文字，画像，色などの情報がそうです。

この度，香川大学図書館が導入することを決めたというCD－ROMとその情報を読み出す機器は，図書館の姿をまた一つ変えることになると思われます。コンパクトディスクによる読み出し専用メモリであるCD－ROMは，例えば，直径12センチのもの１枚で，広辞苑30冊分の情報を記録することができると言われています。つぎつぎと，幾枚ものコンパクトディスクから情報を読み出すこともできるようです。端末のスイッチを入れることによって，情報の大海に舟を漕ぎ出すことになりますから，必要な情報を探し，取り出す検索方法の開発が不可欠になります。優れた検索機能さえ備えていれば，という条件がつきますが，必要な情報をたちどころに取り出すことができるようです。磁気に弱く，データの保存性にどれだけ信頼がおけるかという不安が残されていることを考慮しても，広辞苑30冊分を，直径12センチ，厚さわずか数ミリのコンパクトディスク１枚ですませることができる空間の変化を考えると，未来の図書館の姿を，一瞬，夢想してしまいます。

それは，広々としたフロアに，コンピュータの端末やプリンタなど数種の機器が置かれ，利用者は，それぞれに機器を操作し，必要な資料を検索し，必要な箇所だけ印刷する，あるいは媒体に複写している，図書のない図書館の姿です。図書館は，情報の中枢と中枢とを結ぶ地域の情報基地として機能し，電気と電話とパソコンさえあれば，図書館との通信によって，世界中どこででも同じように仕事ができる日が遠くないように思われます。

その時には，研究室や家庭の本棚には，書き込みや傍線，時にはコーヒーのしみのついたファイルが並ぶことになるのかもしれません。それは，仕事仲間や家庭と共に過ごした記録でもあると思われます。

文献整理を担当して

法学部教授
三谷　忠之

最近，斎藤秀夫編，注解民事訴訟法全７巻（第一法規出版）の改訂版刊行に際して，文献整理を依頼され，図書館を頻繁に利用し，いろいろな書誌情報にも接してきた。

まず何よりも，法学部創設からやっと10年になろうという大学の図書館であるから，関係図書の在庫が少ないことは仕方がない。しかし，発行年月日順に整理する必要があることから，種々の問題がある。書誌情報からは，年月のみしか判明しない。そのために，どうしても現物を確認せざるをえなくなる。ところが，製本のまずさ及び雑誌等の発行年月日記載場所のまずさから，発行年月日が不明な場合がかなりあった。例えば，発行年月日等を雑誌の背表紙に近いところに記載しているために，製本によって巻号まで全く見ることができないものがある。これは出版社も考えるべきことであろうが，製本の仕方についても一考してほしいところである。一部の雑誌がしているように，各頁に発行年月日の記載をも望む次第である。

ある程度の論文を発表すると，一冊の単行本にまとめて刊行されることが多い。これは見ることのできなくなったものをまとめ直して再録したりされる。それは読者の便宜のためでもある。そうであれば，従来の掲載雑誌名だけでなく，発行年月日までも再掲してほしい。もとの論文を見れる場合には比較もしたいわけであるから，論文集にまとめるにあたっては，情報は詳しくして欲しい

と考えているのであるが，原典さえ掲載されていない論文集も出版されたりしている。これでは初出誌についても調べ直さなければならず，読者の便宜には何等なっていない。それぞれの著者の主義がある故に，主義が違うといえばそれまでとはいえ，論文集の刊行や書誌情報の整理について一考をお願いしたいと思い，本稿を草した次第である。

また，検索もカタカナ入力しかできず，ローマ字入力できないのも，文献整理にあたって不便を感じた。

情報過疎

農学部助教授
豊福　俊英

研究者にとって先端かつ良質の情報を迅速に入手することは極めて重要である。

私は昭和52年10月に本学に赴任以来今春まで図書館（本館）を利用したことが一度もない。農学部分館の利用も，複写機の利用とコンデンツサービスを除けば，極端に申せばわずかに研究室購入図書の手続き・受取りにいくだけであった。これは私の研究分野が本学では少数であるため，図書館（本館）および農学部分館に利用できる専門分野の図書が殆どなく，研究室購入図書あるいは個人で購入した図書・学術誌だけを研究のための専門書として利用し，また手元にない必要な文献は知人・友人に電話や手紙で複写を依頼してきたためである。ただし，農学部分館でも文献の複写サービスを行っていることを知らない訳ではないが，時間と経費が多く必要である（と私は思っている）ため利用したことはない。しかし，今春から図書館委員および農学部図書委員として本学図書館を見直す機会が与えられ，図書館にいくこととなった。これまで本学図書館のイメージとして図書を収集・蓄積し，その蔵書を中心に運営されるものだと思いこんでいたが，１大学の図書館にとどまらない学術情報流通の拡大・整備等が検討・推進されていることを知った。そのなかには，学術情報ネットワークの整備，キャンパス情報ネットワークの整備，データベースの作成・提供の充実，大学図書館間複写サービスシステムの確立および電子図書館システムの開発・導入等があり，これらが整備されれば地方の大学の研究者でも先端的な学術情報を迅速・的確に入手できるようになると思われる。

私が1987年９月に訪れたスイス連邦工科大学（チューリヒ）では，約３週間足らずの滞在期間中招へい頂いた教授のご好意で研究室を一人で一室使用させて頂いた。大学の情報検索システム（ETHICS）を利用すると，私が使用させて頂いた研究室にある端末からキィワードを入れるだけで多くの専門分野に関する情報を迅速に入手することが出来た。このキィワードは，人名（著者），国名または専門用語等（キィワードは１つでも複数の組合せでもよい，また英語・ドイツ語いずれでもよい）を入れれば，例えば教授の名前を入れるとこれまで教授が発表した論文・著書等の情報がモニターにでてくるものであった。この情報をもとに教授のところにいた６名の助手の誰かに依頼すると，図書の貸出あるいは複写が容易に行えた。ちなみに，キィワードとしてKAGAWAを入れてみたところ，香川大学の文献２件とカガワ姓の著書３件がモニターに表れた。初めての利用者でも非常に利用しやすいシステムが構築されていたことに感謝した。このような検索システムが本学の図書館でも昨年春から導入されているが，まだ利用できる範囲も狭く今後の整備が望まれる。

私のように専門分野の図書が少なく本学図書館（農学部分館も含めて）の利用をあきらめていたものが，他の情報機関からの情報を迅速かつ経費の負担の少ない利用方法が開ければ多いに利用したいと思う。

一方，本学図書館の学術情報流通の拡大・整備についての情報をもっと全大学構成員に周知する必要があるのではなかろうか。たとえば，この図書館だよりに，この原稿を載せるスペースがあるのだから，もっと多くの図書館情報を載せられるのではなかろうか。

また，本学図書館が主要情報機関として，単なる学術誌を取り扱うところではなく，文化・知識・情報サービス機関として整備・拡充されていることの情報も併せて全大学構成人に広く・迅速に周知できる手段が確立されることを望むのは私一人であろうか。